

李商隐

李 商 隱

高橋和巳注

中國詩人選集 15

昭和三十三年八月二十日 第一刷発行 ©
昭和三十六年十月二十日 第三刷発行

定価二二〇円

注 者 高 橋 和 巳

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
印刷者 山 田 一 雄

発行所

東京都千代田区
神田一ツ橋二ノ三 株式会社

岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解説	五
錦瑟 きんしつ	二
房中曲	三
歌を聞く	四
曲江	六
楽遊原 らくゆうげん	四〇
重ねて聖女祠 よぎ を過る	四二
無題（颯颯たる東風 細雨来る）	四四
無題（昨夜の星辰 昨夜の風）	四七

無題（相見る時難く別るるも亦難し）	四
無題（重幃 ちようい 深く下す 莫愁 ばくしゆう の堂）	五〇
中元に作る	五三
常娥 じようが	五五
碧城三首	五
無題（情を含む 春晚 えんばん 晩）	六
無題（聞道 きくな らく 閨門 しやうもん の萼綠華 がくりよくか ）	六
無題（八歳にして儵 ひそ かに鏡に照 う つし）	七
無題（来るとは是れ空言 去 あと つて蹤 あと を絶つ）	六
無題（鳳尾 ほうび の香羅 薄きこと幾重 いくちゆう ぞ）	七一
無題（何 いずれ の処 ところ か哀箏 あいそう は急管 しつこ に随 したが う）	七三

牡丹 五

柳 六

李すももの花 九

日日 八

霜月そうげつ 三

春日 懷おもひを寄す 三

秋日晚思 四

蟬 六

西亭 八

幽居 冬の暮 八

少年 〇

淚 二

辛未七夕しんび 五

劉りゅう司し戸こ蕢たんに贈る 六

劉蕢を哭す 九

令狐れいこ郎ろう中ちゆうに寄す 一〇

杜と司し勲くん 一三

潭州たんしゅう 一四

桂林 一六

荊門けいもん 西より下る 一八

搖落 二〇

夜雨 北に寄す 二三

涼思 二四

天涯 二六

北青蘿ほくせいり 二七

僧壁に題す 二八

宮詞 きゆうし	二〇
漢宮詞 かんきゆうし	二三

賈生 かせい	二三
-----------------------	----

茂陵 もりよう	二四
------------------------	----

籌筆駅 ちゆうひつえき	二六
----------------------------	----

南朝	三一
----	----

北齊	三四
----	----

景陽の井	三五
------	----

隋宮	二六
馬嵬 ばかい	二四〇

驕兒の詩 きようじ	二四三
--------------------------	-----

行きて西郊に次る作 やど	二五四
-----------------------------	-----

韓碑 かんび	二八
-----------------------	----

年譜	二〇三
----	-----

跋	二九
---	----

略図	二九
----	----

解 説

李商隱（八一二—八五八年）が生きた時代、——それは、その広大な国土に空前の文明社会を築いた唐王朝が、建国してよりほぼ二百年、漸く疲弊して崩壊への道をたどり始めたころだった。皇帝を頂点として、支配権力・行政組織・監査機関など、あらゆる政治の要素が集中的に統一されていた唐朝の官僚機構は、藩鎮や異民族に統制組織とその経済的基礎を、外戚や宦官に権力の継承と分配を、朋党によって行政と監査の法的安定を、それぞれに蚕食され、小規模な修正ではもはやどうすることもできない状態になりつつあった。西暦でいえば九世紀前葉、第十一代皇帝憲宗の元和年間から、十六代皇帝宣宗の大中年間まで、世にいう晩唐のはじめである。そして、その唐朝の文化の精英だった詩文学は、常に政治に敏感な中国文学の当然の歩みとして、その頃、その美の様相を大きく変化させつつあった。

唐詩を初・盛・中・晩の四期に分類するのは明の高棅（一三五〇—一四二三年）の「唐詩品彙」に最初の確定を見るが、以後たしょう補正されつつも、文学史上、この時期の文学は、盛唐の極盛、中唐の再興などに対して「晩唐の変」と称されている。

唐詩の絢爛は、人も知るように、いわゆる盛唐の時代に既に一つの完成を見ていた。李白（七〇一—七六二年）・杜甫（七一二—七七〇年）・王維（六九九—七五九年）ら、その期に輩出した詩人たちは南北朝末期のプレシオジテの桎梏を脱し、人間の現実との正しき相関の上にその詩の美を構築した。ところが、

この晩唐の時代にいたると、詩の格調は一般に極度に繊細化され、内容にローマン的、ときには頹廢的な色彩が濃厚になる。中唐の時代、白居易（七七二—八四六年）・元稹（七七九—八三一年）によって試みられた表現の平易化運動、韓愈（七六八—八二四年）とそのグループの新奇嗜好や苦吟癖などは、勿論晩唐の各詩人にそれぞれ受けつがれるけれども、晩唐詩の大勢はやはり〈変〉と称されるにふさわしい一種獨得な領域へと流れていった。無論、多くの詩人がおり、若干の傾向がなお共存してあった一時期の文学を簡単に規定はできない。当然例外を含みつつも、敢ていえば、文学の純粹化、一種の唯美主義がこの時代の特徴となったといえる。原則として専ら政治的だった盛唐期の詩人の思念が、正面きって対処しなかった人間の非政治的側面、例えば男女の愛への強い関心が生まれ、あるいはまた空想性の大胆な導入が行われた。形式的には、律詩が第一級文学たる詩の、その精髓として意識され、詩人たちは華美な表現、そして精巧な対句の製作にその才能を賭する。この時代の代表選手と目される、杜牧（八〇三—八五二年）、李商隱、温庭筠（八一二—？）ら一流の文人の文学には、勿論いまままで開拓された詩の可能を広く含んで推し進めようとする多角的努力が認められるけれども、やはり最も特徴的な点は、唯美主義的傾向、——時には文学を至上視する傾向——にあったことはいなめない。形式的にも、杜牧は絶句に、李商隱は律詩に、温庭筠は新たな詩形、詞のジャンルに、卓越した傑作を多く残している。

こうした文学の傾向の変化は、国家の政治的衰運が直接導ききたったものでは勿論ない。また要因として数えるべきものは他にも数多い。だが、官吏たるべく運命づけられたインテリゲンチヤの属する現実の変化が、彼らの現実に対する態度の変化をうながしたことは事実だった。晩唐の詩人陸龜蒙は、「詩人の窮厄、多く天物を暴して造化の秘を発くの報いにして、李賀の夭し、孟郊の窮し、李商隱の官、朝籍に掛け

ずして死せるは、皆之が為なり。」という。すでに中唐の末から、或いは苦吟嘔心し、或いは文学への愛のためにことさらに官において無能となり、美の生贄^{いけにえ}として不運に死んだ詩人達がいた。晩唐の時代には、詩人の生き方において、現実生活と文学との関係は、ほとんど一般的に、その比重を顛倒させるのである。「君樂府を唱うに非ずんば、誰か秋を怨むことの深きを識らんや。」(巴童に答う)と云ったのは李賀(七九〇—八一七年)だが、自然ばかりではなく、歴史や現実についても、その日常的な、或いは学的な認識よりも、歴史や現実を逆に自己の想念で塗りつぶそうとする態度が生れてくる。そして、その想念を主導する基本的価値感^{きほんてきちやく}は、官僚機構を理念的に支えてきた伝統的な秩序意識、あの儒教倫理からは概ねはみでていたのである。

望断す 平時 翠輦^{すいれん}の過^{よぎ}りしを

空しく聞く 子夜^{しや} 鬼の悲歌するを

と歌い出される李商隱の「曲江」の詩(三八ページ)においても、人はその結句に

天荒れ地変じ心折ると雖も

若し春を傷むに比^{くら}ぶれば意未^いだ多からじ

とあるのを読むに到って、最初は些か度を過した誇張であるかのように訝るであろう。だが、李商隱の詩篇を多く読み進むにつれ、一人の女人の死を、革命とそれに伴う犠牲への傷心以上に嘆息さるべきこととすることこそが、他ならぬ晩唐人の価値意識のあり方であったことに気づくに違いない。「清時味有るは是れ無能」(將に呉興に赴かんとして樂遊原に登る)とシニカルに歌う杜牧はまた、江湖におけるみずからの落魄を、朝廷との関係においてではなく青楼に羸^かち得た薄倖^{はくこう}の名で表現する(懷を遣る)。

「此の生は只だ是れ詩債を償わん」(白菊雜書)がためといったのはやや時代を下る司空圖(八三七—九〇八年)であるが、酒飲むことを以て忙事と為し、浮生は詩を除けば尽く強名(杜牧の句)、といった考えをもらす詩句は晩唐詩の中に夥しく指摘できる。以前とは異った価値意識——例えば文学を経世の業とするような意識とは異った——その価値意識の上に生れた美への没入、そしてまた、現実には野心があつても、作品の上では任官を束縛だと表現するような一般風潮の中で、一種独自の方法により、その表現主義の極限を生きたのが、李商隱だった。

李商隱の文学は、彼自身で編んだ文集「樊南甲集」の序文で触れているように、二つの異った傾向から滋養を得て形成された。一つは南北朝末期の爛熟した修辭主義、特に任昉(四六〇—五〇八年)、范雲(四五—五〇三年)、徐陵(五〇七—五八三年)、庾信(五一三—五八一年)らの文学、もう一つは杜甫の詩や韓愈の文章など、人間直視の文学及びそれに類するものである。文章家としての彼は、最初の保護者令狐楚(七六五—八三七年)の勧告によって弱冠のころ、古文から章奏の文(四六駢儷文)への翻身を行っているが、詩においては、内に流れる情趣は逆に、年を追うに従って沈痛な、杜甫的格調への歩み寄りを見せた。凝集された感傷と濃厚な駢文的発想、一種もの悲しい空想性と杜甫的な内面化されたりリアルさ、それらの見事な融合と統一によって、彼の詩は比類なき真実の文学に完成された。——ただし、その完成は、一読その旨意を汲みとりうるような明快平易な形態はとらなかった。

金の文豪元好問(一一九〇—一二五七年)はその論詩絶句に「詩家総べて西崑の好きを愛するも、独だ人の鄭箋を作る無きを憾む」と歌って、儒教の經典「詩経」における漢の鄭玄注の如き秀れた注釈のなことを遺憾としている。異国の、言葉や習慣を異にする者にとってばかりではなく、教養高き十三世紀

の文学者にもすでに李商隱の詩は難解だったのである。彼の詩が晦渋を極め難解を極めることの理由は様にある。そして、また彼の詩篇を難解にしたものが、彼の文学のあり方の秘密とも深く関係する。

宋の楊億（九七四—一〇二〇年）の雜記「談苑」に、李商隱は文章を作る時に、「多く書冊を簡えらび閱けんし、左右に鱗次して、鰓だうさいぎよ祭魚と号し」という一文がみえる。魚を捕えた鰓かわうそがそれを食う前に岸上に羅列する（「礼記」月令篇に見える）奇習に借りてそのデイレクティブたえズの喩としたこの逸話は、確かに彼の詩の性質と創作方法をもよく象徴している。莊重なクラシカル・アリユージョンで文を飾る公文書と違い、詩作の場にまで実際に用例検索の手続きなど持込みはしなかっただろうが、自らを時に詩中に書痴とも称する博学と強記は、その詩をも、ちりばめられた夥しい典故で飾ることとなった。その難解さは、従ってまず読者に程度の高い、広汎な予備知識を要求するところから来る。だがこれだけならば、徐陵じよりうや庾信ゆしんをはじめ、こうした方法が一世を風靡した前例があり、少くとも中国の文学史上においては特に異とするにはあたらなない。李商隱の特異性の一つは、いままで文人達に守られてきた典故修辭法の默契をつき破っている点にある。元来、伝統尊重の精神に育まれた典故の技術は、權威ある基礎的教養書、「詩経」や「論語」、「莊子」や「史記」、「漢書」等に含まれる語彙や人物事跡にその範圍は凡そ限定されていた。丁度ヨーロッパ文学におけるギリシャ神話や聖書のように——。ところが、李商隱はいわゆる僻典をもさけなかった。たとえば、古典主義全盛時代の絵画の題材は、ギリシャ・ローマ時代の戦争や饗宴に限られていたのに、ローマン派が、東方の神秘的風俗や色彩を強引に持ち込んだようなものだと思っていたくといふ。稗史小説類にのみ語り伝えられる事柄を堂堂と比喻に借り、事柄ばかりか、その発想をも大胆にその詩に導入したのである。

太和七年華州刺史となった崔龜從に寄せた自己推薦状の中で、彼は——詩ではなく文章についてではあるが——次のように云っている。

「始め長老の言を聞き、道を学ぶには必ず古を求め、文を為るには必ず師法が有りましたが、常に惓惓として快みませんでした。退いて自ら思い、次のように曰ったものであります。そもそも謂わゆる道とは、どうして古に謂わゆる周公・孔子のような者だけが独り能くするものでありましょか。蓋えてみますれば、愚も周公・孔子と俱に之を身え得るものであります。それゆえに道を行うことは今古に繋りませぬ。だから筆を揮って文を為るのに、経史を攘取するを愛して、時世を諱み忌っては何りませぬ。百経百書、異品殊流も、またその意をその下に分ち出し能るものではありませんまいか。」

伝統的な価値序列を排して、古き栄光と現代とを、權威ある經典と通俗の書とを平等の目を以て見る見方が、典故や一一の詩句に限らず、李商隱の文学の全体を一種朦朧の雰囲気で包むことにもなる。その奇妙なまでの平等視は、現実の世界と幻影の世界、過去と現在、そして既存の觀念形態——儒教・道教・仏教に対する態度にすら一貫してつらぬかれるからである。

この選集におさめた詩篇から例をあげれば、「潭州」の詩（一〇四ページ）で、

潭州の官舎 暮樓空し

今古 端無くも望中に入る

と自らことわりつつ、眼前に展開される風景と、風景に纏る古今の事跡を、時間の前後系列を無視して交錯させているのを人は見る。そしてそれは、どの詩篇においても多かれ少なかれ行われていることなのである。また、「碧城」第三首（六二ページ）では、

武皇の内伝 分明に在り

道う莫れ 人間 総て知らずと

と後漢の歴史家班固に偽託される六朝の小説「漢武帝内伝」に載せる、漢の武帝と仙女西王母との非現実的な逢瀬の物語を、彼は、この現実にも起りうることに於いて提出する。彼が深い共感のもとに書き綴った有名な李賀の伝記も、起り得ない白玉楼中の事柄を、あたかも現実の事件のごとく、同一の地平に、同一の価値を与えて提出して見せる。

また、引用は長きにわたるので避けるけれども、いま、儒教的倫理によりつつ悲憤慷慨しているかと思えば、道教夢幻の世界を歌い、また仏教への帰依心をもほめかすのも、李商隱が全く無思想な人間だったのではなく、同じ平等視の一つの表われだったのである。

「人は五行の秀を稟け、七情の動きを備うれば、必らず詠嘆して以て性靈に通ずる有り。故に陰に惨み陽に舒ぶ、其の塗一にはあらず。安樂哀思、厥の源は数千なり。」（相国京兆公に献ずる啓）その源は数多く、その表われ方が多岐にわたっても、真情の詠嘆であれば、李商隱には等しく尊ぶべきものと見えたのである。彼の把えにくさは、一つの規定で彼をしぼることのできない点にもある。彼の言わんとする志は、過去と現在、架空と現実、その他様様の異質なものが、畳みかけるように同次元に羅列され、夥しい典故に隠蔽される故に、卒読しては意味を了解し難い。ちよっとした即興の場合ですら、例えば詠物詩においても、題に与えられている花鳥の姿が、詩の表面のどこにも現われないという事態が屢々おこるのである。（七五ページ牡丹の詩を参照）

今、彼がこうした曲折した発想法を何故採用したかを論証しつくすことは、この解説の紙面では不可能

である。詩の定形が確立されてその爛熟期に入ると、形式と内容との均衡よりも、どれだけ厩大な内容を一定の形式に含めうるかに詩人の才能が賭けられることは、文学史上の常識であるし、詩のイマージュは、言語の觀念倍化が伴えば伴うほど豊富になる事を詩人が自覺していただろうことも、その理由に数えうる。だが、もう一つ、彼の詩の難解さをもたらした原因と関連して、充分ではなくとも、欠かすことのできない理由の推定を、やはりここで指摘しておかねばならない。それは、他ならぬ、彼の経歴と密接に關係し、彼の置かれた現実の状況ときりはなしては説明することができない。

李商隱は字を義山ぎざんといい、憲宗皇帝けんそうの元和七・八年頃、西曆にして八百十二・三年、懷州河内かいしゅうかだい（河南省北辺の地）に生れた。系図は、強いて求めれば、遠く唐の帝室李氏とのつながりを持つが、祖父も父も、郡県の官、節度使の属官でおわった、下級士人の家柄だった。彼には二人の弟、六人の姉妹のあったことが解っている。姉妹の嫁いだ先の人物の、李商隱自身の碑銘や祭文を見ても、その家の交際範圍は下級士人の階層を出なかつたことが解る。例えば、姉の夫徐某じょを祭る文において、彼は、「嗚呼、君の文学を以て、君の政術を以て、幼くして以て自立し、老いて倦まず。亦た以て君子人と為す可し。君子人歟。而うして清途に即つかず、貴仕に階のぼらず、此れ其れ命なり。」という。皮肉にもしかし、これはほとんど李商隱自身の運命であり、結局、祖父や父の経歴以上に彼は出ることはできなかった。しかも下降する時代に生を稟けた不運で、小さくとも安定し、独立性ある生活を我がものとするにできなかったようである。この書物に見える「涙」の詩（九二ページ）は、ただ行きずりに見た不運な書生への同情ではなく、彼の苦渋に満ちた経験の、恐らくは偽らぬ吐露であるだろう。

彼の別号を玉谿生ぎよくけいせいともよび、詩集が「玉谿生詩集」と名づけられるのは、郷里の住い近く、玉谿と呼ばれる山峽があり、その道観で若年の頃勉強したことがあるからである。進士たるべき正統的教養と共に、若くして身につけた道家哲学の知識は、——道教が国家権力と結合し、皇帝の功利的欲望に迎合することには終生批判的であつたけれども——後年彼の文学の想像力を決定的に方向づけることとなつた。幼くして父を失つた彼は、最初、天平軍節度使令狐楚れいこそにその文学の才能を見出されて庇護を受けた。それまで、韓愈・柳宗元りゅうそうげんらの古文運動に共感していた彼は、章奏の文つまり四六駢儷文べんれいの名家でもあつた令狐楚の忠告によつて、このとき駢儷文に手を染めた。それがまた、後年、温庭筠おんていじんや段成式だんせいしきと並んで、その排行——すなわち一族中、同世代の者の誕生の順位を示す呼び名——が同じく十六であつたところから三十六体と称される一流の駢文家李商隱を生む契機となつた。と同時に、彼の以後の経歴のあり方を決定することともなる。彼はまた、兗海觀察使の崔戎さいじゆうにも才能を愛され、青春の初期には、孤児としては寧ろ得意な道を歩み得たと思われるが、進士となるまでの間に、またその後の専科の受験に何度か失敗する間に、實力よりも推薦者の、そして推薦者の派閥がものをいった官僚制度の実体を否応なしに知らねばならなかつた。激しい憤激を以て、後年、陶進士とうしんじなる人物に与えた手紙の中に、この間の経緯は回顧されている。彼にとつて最も不幸だつたことは、進士及第後まもなく、保護者令狐楚が死んだことだつた。まだ専科試験に及第せず、従つて官につきえなかつた彼は、反对党の王茂元おうもげん（？——八四三年）に、認められるままに庇護を求めたのだつた。当時、唐朝の官僚社会は、李德裕りとくゆう（七八九——八四九年）の党派である貴族派と、牛僧孺ぎゆうそうじゆ（七七九——八四七年）・李宗閔りそうびんの派閥である進士試験の及第者とが二大党派に分裂して、ほぼ前後四十年間、政權の争奪戦を行なつていたのだつた。令狐楚は牛僧孺の派の人物、第二のパトロン王茂元は李德裕直系

の党人だったのである。才能ある故に王茂元にも愛され、「香奩集」で知られる韓偓の父、韓瞻とともにその女婿となり、また彼の推輓で秘書省校書郎の官にもついた。しかし、複雑な権力機構の網の中で、また複雑である故に嫉視誹謗のともないやすい官僚社会で、彼は人から指弾される人物となり、インテリゲンチヤが直截な対社会的発言をなすために武装する潔白、大義名分性をおのずからにして失った。

「歌を聞く」(三四ページ)の詩に典型的に見られるように、権力者の庇護によってしか生きられぬ女官、仕える人の死にあえば帰って行くところのない側女の嘆きを、彼が繰返し歌う根拠の一つは多分このあたりにある。

李商隱の生涯の間には、卷末の年譜の時事の項に示されるように、相繼いで反乱や異民族の侵入があったが、それらの騷擾のうち、文宗皇帝の太和九年(八三五年)に起った、世に「甘露の変」と称される鄭注(？—八三五年)・李訓(？—八三五年)によるクーデターは、直接李商隱の身に影響は与えなかったけれども、やはり一言触れておかねばならない。それは宦官仇士良(七七九—八四一年)・魚弘志ら、宮廷に巢喰う茶坊主の政治干渉を排することを名目とし、牛李の党争の間隙を縫って新勢力を樹立しようとする陰謀だったが、忽ち露見して、無関係な宰相王涯(？—八三五年)らまでが殺害され、令狐楚ら重臣が進退に窮して醜態をあらわした。——二十九歳の李商隱にとっても公憤とは別に甚だ後味の悪かったであろう大事件だった。この事件は、政治的收拾の方法如何よりも、李商隱のみならず多くの晩唐詩人達の唐王朝への信頼を破壊するに充分だったと思われる。そして、皇帝のかわる度に、牛李の党派の相互の優越が、がらがらと転倒した事実と相まって、少なくとも思念の上ではやはり経世を考慮した詩人達に、建言し訴えるべき明確な対象を見失わしめた。